高校生が“地元の魅力”を握る――北九州市立高校が仕掛ける「おにぎりプロジェクト」の挑戦

全国の高校生が地元食材を生かしたオリジナルおにぎりを考案し、日本一を競う「おにぎりプロジェクト」。その舞台裏には、探究学習の新しい形を模索する教師たちと、生徒たちの熱い挑戦がありました。
今回は、中心となって企画を進めてきた北九州市立高校の森事務長と阿部副校長に話を聞きました。

■「やるなら楽しく」――プロジェクト誕生の背景
――おにぎりプロジェクトを始めたきっかけを教えてください。

最初は浜松学芸高校さんが校内で始めた取り組みでした。
チームをつくって“地域の魅力を発信できるおにぎり”を考えるという企画で、そこに私たちも参加をさせていただきました。
昨年は浜松に京都の開建高校、そして私たち北九州市立高校の３校が集まって開催されました。
北九州市立高校チームが「とんこつラーメンおにぎり」で優勝し、今年は開催校となりました。
せっかくなら、もっと楽しく、もっと面白くしようということで、今年は熊本市立必由館高校を含む６校での実施となりました。

■「おにぎりは最高の探究教材」
――なぜ“おにぎり”なのでしょう？

おにぎりって、探究のサイクルがとても回しやすいんです。
食感がベチャッとしていたら水分量を調整する、味が薄ければ調味料を変える。改善がしやすく、試行錯誤の手応えも得やすい。まさに探究学習にぴったりの教材だと思います。

■スタジアムを会場にした理由
――今年はミクニワールドスタジアム北九州を会場にしたそうですね。

実は最初、小倉城の天守閣で食べてもらう案もありましたが、参加校の増加、調理スペースの問題がありました。ミクニワールドスタジアム北九州なら電光掲示板も使えますし、“サッカース

タジアムでおにぎりイベント”というギャップがおもしろいと思いました。

■資金難をどう乗り越えたか――生徒の「インタビューシップ」をきっかけに
――食材や旅費など、資金面の課題はかなり大きかったのでは？

はい、とても大きかったです。
昨年、北九州市立高校では学校の中に株式会社をつくりました。
さらに、福岡ひびき信用金庫と連携協定を結び、「とんこつラーメンおにぎり」で前年度優勝した生徒たちも調印式に参加。自分たちで自校開催のための企画内容をプレゼンして、協力をお願いしました。
また、福岡県中小企業同友会さんの協力を得て、生徒が地元企業に2日間訪問して取材する「インタビューシップ」という取り組みも始めています。企業理念や社員の働き方など、2日間たくさんインタビューする企画なのですが、その際に日頃からお世話になっている企業のみなさんが応援しようと言ってくれて支援が一気に広がりました。

■校内予選から本戦まで、2 か月の本気の挑戦
――生徒たちはどんなふうに参加するのでしょうか？

エントリーはチーム単位で、北九州市立高校では 9 チームが参加しました。
10 月にキックオフしてから、毎週金曜日は試作会とプレゼンの練習を交互に行いました。土日は家に集まって試作するチームもいます。
本番 1 週間前に代表チームを決めます。ほとんどが 1 年生ですが、どのチームもとても頑張っていて、審査する側は本当に悩みますね。

■“大人には思いつかない”おにぎりの数々
――印象に残っているアイデアは？

肉肉うどんおにぎり、もつ鍋おにぎり、鳥皮おにぎり…。
大人では考えないようなアイデアばかりで、むしろ勉強させられます。
大会後には協賛企業から「このレシピを使いたい」「早くレシピを送ってほしい」と言われたこともあります。

■外部との連携――“教えすぎない”バランス
――外部の専門家と連携することもあるのですか？

はい。今年は栄養学や調理を学ぶ卒業生、近くの大学の先生にもアドバイスをいただきました。ただ、アドバイスを素直に聞くと“完成された味”になってしまうんです。
高校生らしい、“不完全さ”が、このイベントの面白さでもあります。そのため生徒の自由な発想や主体性とのバランスも大切にしています。

■涙を誘うプレゼン、生徒の成長
――審査員の反応はいかがでしたか？

「どこの学校も本当においしい」と驚かれていました。
それ以上に、プレゼンで涙ぐむ審査員の方もいたほどです。
高校生が一生懸命やっている姿を純粋に応援していただき、「元気をもらいました」と多くの方が話してくれました。

■おにぎりを超えた学びへ
――プロジェクトを通して、生徒たちはどんな力を身につけているのでしょうか？

おにぎり抜きにしても、生徒たちの力になっていると実感しています。
何かを PR する方法を考え、試行錯誤することは、探究学習の入口になっているのだと思います。
来年はさらに参加校の拡大もできると嬉しいなと思ったりもしています。
これからもっと輪を広げていきたいです。

■取材を終えて――編集者の所感
おにぎりという身近な食べ物を通して、先生方や生徒のみなさんがこのプロジェクトにかける熱い思いを知ることができました。また、参加した生徒のみなさんは、おにぎりの新しいレシピ以上に何か大きなものを得ることができたのではないかと思います。森事務長、阿部副校長、貴重なお話をありがとうございました。

チーム おにぎり